

(2) 出前講座の開催・運営

1) 実施概要

① 目的

避難指示解除区域等における森林・林業の復興・再生には、放射性物質の挙動や移動抑制対策、森林整備等の林業生産活動が将来どのような状態になるのか、その見通しが示されることで初めて、目標をもって活動を進めることができる。

出前講座では、福島県に関連する各団体等が行う会合等の機会を利用して、森林における放射性物質の動態、林業再生に向けた取組についての説明及び意見交換を行う。

各団体の希望にあった個別のカリキュラムを提供し、林業・木材産業等に関わる団体にはそこで得た情報・知見を各団体の業務に活用し、林業・木材産業の復興・再生に役立てていただき、児童生徒・教職員には森林・木材・特用林産物の正しい知識を身につけ、理解と関心を深めていただく。講師には研究者のほかに、林業再生に向けて活動している実践者、林業再生に資する取組の実践者等を招き、実践者と受講する各団体間の連携・協力による事業拡大へとつながるきっかけとなることを目的とする。

② 対象団体との調整方法

今年度は、シンポジウムや動画制作で関係のあった団体とのつながりで、小学校及び中学校（合同授業）で実施した。出前講座では初めて中学校での実施となった。

なお、新型コロナウイルス感染症の感染拡大防止の観点から、対策について十分に検討・準備を重ね、当日も対策を徹底した上で実施した。

2) 実施状況

① 開催日時・場所・対象者等

日時：令和3年11月10日（水）14:10～15:40

場所：いわき市立田人中学校 教室

対象：田人小学校5年生・6年生、田人中学校1年生、教職員

受講生数：21名

カリキュラム設計主旨：

小学校・中学校の児童生徒と、指導する立場である教職員を対象として、森林、木材、林産物等の放射性物質の動向について正しい知識・根拠を修得してもらうための情報提供を行った。

さらに、木材利用同様、森の恵みであるキノコ等の特用林産物を生産する地域産業への理解のために、校内での3日間程度のナメコの栽培と収穫体験を実施した。本事業のシンポジウムでもナメコ栽培キットを提供している加茂農産は、学校の近所に立地している。

森林内の放射性物質動態の授業「福島の森、今どうなってるの？」については、基礎情報の伝達を重視しながら、サーベイメーターを用いた放射線量測定実験等を行い、参加型とすることで子どもたちが楽しめる要素を盛り込んだ。シンポジウムのライブ配信と同じ内容を同じ時間配分で行った。

②カリキュラム

14:40～14:50 (10分)	「なめこ収穫体験」 小松雅史氏／(国研)森林研究・整備機構 森林総合研究所 きのこ・森林微生物研究領域 主任研究員
15:00～15:40 (40分)	「福島の森、今どうなってるの？」 篠宮佳樹氏／(国研)森林研究・整備機構 森林総合研究所 震災復興・放射性物質研究拠点長 小松雅史氏／(国研)森林研究・整備機構 森林総合研究所 きのこ・森林微生物研究領域 主任研究員

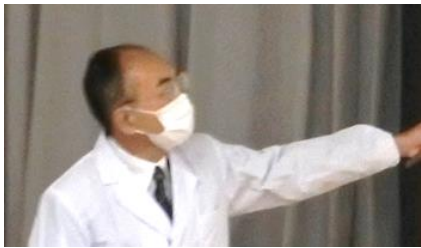
③講義等概要

<p>「なめこ収穫体験」</p> <p>【インストラクター】</p> <p>小松雅史氏／(国研)森林研究・整備機構 森林総合研究所 きのこ・森林微生物研究領域 主任研究員</p> <p>【内容】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ナメコ、シイタケの育ち方、原木・菌床について説明 ・ナメコの収穫方法の説明 ・ナメコの収穫体験
<p>「福島の森、今どうなってるの？」</p> <p>【講師】</p> <p>篠宮佳樹氏／(国研)森林研究・整備機構 森林総合研究所 震災復興・放射性物質研究拠点長</p> <p>小松雅史氏／(国研)森林研究・整備機構 森林総合研究所 きのこ・森林微生物研究領域 主任研究員</p> <p>【講義内容】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・福島県全体の放射線量の推移 ・海外や国内他都市と福島県との放射線量の比較 ・福島県の森林内の放射性物質 事故直後は枝葉にも捕捉されていた放射性セシウムの大部分は、落葉などにより、 土壌表層に移動して集積し留まっている／一部は根から吸収され森林内を循環している ・木材中の放射性物質の濃度 木材中の放射性物質の濃度は、葉・枝・樹皮に比べると低い ・【実験】木材・葉・土の放射線量測定実験 ・きのこ・山菜の放射線量 検査され安全なものが市場に出荷される／基準値を超えたものは年々減少傾向にある／原木シイタケと野生きのこの出荷制限地域／マツタケの非破壊検査

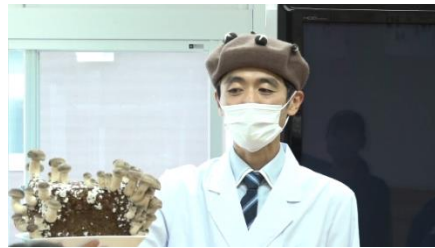
④質疑応答概要

受講生からの質疑がなかったため、掲載なし。

⑤記録写真



(国研)森林研究・整備機構
森林総合研究所
篠宮佳樹 氏



(国研)森林研究・整備機構
森林総合研究所
小松雅史 氏



会場の様子 (ナメコ収穫体験)



会場の様子 (放射線量測定実験)

3)受講生アンケート集計結果

○回収率 100% (21/21名)

■区分

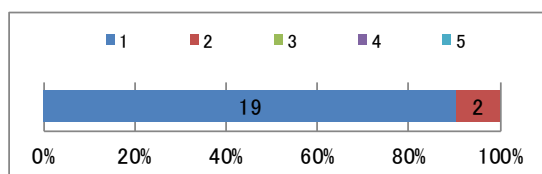
小学生 (11 名)
中学生 (6 名)
教職員 (4 名)

○集計結果

(1) 授業の内容は、どのくらい理解できましたか

① 「なめこ収穫体験」

	高	← →			低
	1	2	3	4	5
回答数 :	19	2	0	0	0
平均値 :	1.1				



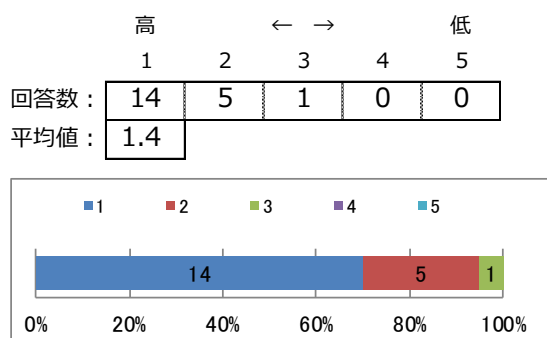
▼主な評価の高いコメント

- ・ ナメコの収穫のことだけでなく、キノコについても教えてくれたので、より詳しく分かった (小学生)
- ・ 実際にナメコを収穫したり、原木を見たりすることができて、内容が入ってきやすかった (中学生)
- ・ 体験活動をすることで分かりやすく学びが深まったと思う (教職員)

▼主な評価の低いコメント

(該当なし)

② 「福島の森、今どうなってるの？」



▼主な評価の高いコメント

- ・実際に土や葉などの放射線量を測って、分かりやすい説明だった（小学生）
- ・写真や図などで分かりやすい説明だった（中学生）
- ・放射線教育はどの教科でも取り組んでいるが、実際に放射線量を測定する機器を使用することでよく理解できた（教職員）

▼主な評価の低いコメント

（該当なし）

(2) その他、感想などを自由に書いてください。

【小学生】

- ・写真や実物を見て詳しい説明を聞けたので、キノコや森林について知ることができた
- ・今まで知らなかったことが知られてよかったし、とても楽しかった
- ・みんなで楽しく森のこと、キノコのことなどが知られてよかった。学んだことを将来に生かしたい
- ・森のことなどいろいろなことを教えてもらいよく分かったし、とても楽しかった
- ・ナメコの収穫の説明だけでなく、その後の育て方や注意することを詳しく教えてもらった

【中学生】

- ・放射線が森の中のどの部分に多くなるかや、ナメコの収穫の仕方が分かってよかった
- ・普段では体験できないことができたのでとてもよかった。当たり前だと思っていた田人の環境が恵まれていると気づくことができた
- ・どの授業も実際に体験できたり実物を見られたりして、とても分かりやすかった
- ・福島の森やキノコについて、前よりも興味を持つことができた

【教職員】

- ・田人地区の子どもたちには大変身近な話題で将来につながるものと思う
- ・放射線と関連した内容で、普段の授業とも関連性を持たせられる内容だった
- ・普段の学校生活では知ることができないことをたくさん教えていただけて、とても楽しかった。貴重な経験となった
- ・田人小・中学校の生徒は非常に多くの体験活動を行っている。子どもたちはさらに田人が好きになり、将来地域のための素晴らしい人材になってくれるものと思っている

4) 受講生アンケート集計考察

アンケートは、今後の普及啓発手法の検討、出前講座の運営等に役立てることを目的に実施した。主に各コマの理解度について集計結果の考察を行った。例年の出前講座ではアンケートで満足度を聞いているが、アンケート記入時間を短くしたいという学校の要望もあり、また、こちらの提供した情報が正確に伝わったか、説明方法等の改善点が見えるよう、理解

度に絞ってアンケート様式を設定した。そのため、過年度の出前講座との比較は行っていない。

①出前講座の内容に対する理解度

理解度は1（高：とてもよく分かった）から5（低：まったく分からなかった）までの5段階評価で実施した。各コマの理解度をみると、1と2の割合が「なめこ収穫体験」100%、「福島の森、今どうなってるの？」95%と非常に高く、1の割合もそれぞれ90%、75%という高い結果となった。

「なめこ収穫体験」では「実際にナメコを収穫したり、原木を見たりすることができて、内容が入ってきやすかった（中学生）」など、実物の菌床や原木を使った説明と、ナメコ栽培キットを使って実際に収穫体験を行ったことで理解が深まったとのコメントが多く寄せられ、非常に高い理解度となった。

「福島の森、今どうなってるの？」も同様に、「実際に土や葉などの放射線量を測って、分かりやすい説明だった（小学生）」等、サーベイメーターでの放射線量測定実験や写真・図等を多用した資料、説明方法の丁寧さが高く評価された。

②出前講座の内容について感想等

「今まで知らなかったことが知られてよかったし、とても楽しかった（小学生）」「福島の森やキノコについて、前よりも興味を持つことができた（中学生）」等の感想が寄せられ、これまで知る機会のなかった森林やキノコの新たな情報や知識が得られ、理解が進むとともに、森林・林業・林産物への興味が促進された様子がうかがえた。また、「みんなで楽しく森のこと、キノコのことなどが知られてよかった」とのコメントに代表されるように、講義の中でクイズ等を挟むことで、最後まで集中し興味を持って受講できたとのコメントが多く寄せられた。

5)企画・運営改善

準備から当日の企画・運営等について、実施状況、出前講座実施後のミーティング、受講生アンケート等から、成果、問題点、改善方法案を取りまとめた。

①企画・準備、その他全般

成 果
<ul style="list-style-type: none">・出前講座は小規模の講座であり、対象団体と調整を行いながら希望の内容を細かく工夫することが可能であったため、対象団体のニーズに合った内容により、理解度が高く、効果的な普及啓発手法となった。具体的には、「なめこ収穫体験」100%、「福島の森、今どうなってるの？」95%と非常に高く、1の割合もそれぞれ90%、75%という高い結果となり、情報提供の内容・レベル・説明方法は適切だったと言える。・教育機関での出前講座は、平成30年度に高校、令和2年度に小学校で実施しているが、今年度初めて中学校を対象に実施した（小学校と合同授業）。小学校での実施同様、対象者が最後まで飽きずに講義内容を聞けるように、興味を持ったり楽しめる内容を盛り込むこととし、サーベイメーターによる木材・葉・土壌表層の線量測定を子どもたちに実施させることを試みた。・対象者の興味のある内容について、どうすればそれが対象者に伝わるのかということ

<p>を追求し、カリキュラム、説明資料・説明方法を工夫していることで、受講生の理解度が高まっていると考えられる。</p>	
問題点	改善方法案
<p>年度当初に出前講座を4回程度実施する計画であったが、新型コロナウイルス感染症の影響により実施の縮減を余儀なくされた。</p>	<p>今年度、新型コロナウイルス感染症の感染拡大防止の観点から、オンラインでの出前講座も検討したが、出前講座は受講生と講師陣、受講生間での活発な対話を重視していることから、オンラインでの実施が難しい面があった。今後も、幅広い普及手法を検討していきたい。</p>

②出前講座当日の対応、実施結果等

成 果	
<ul style="list-style-type: none"> ・新型コロナウイルス感染症対策について十分に検討・準備を重ね、当日は対策を徹底することで、混乱なく実施することができた。 ・森林内の放射性物質動態の授業でも、サーベイメーターによる木材・葉・土壌表層の線量測定実験を行い、子ども達が興味・関心を持って講義を聞いたことから、高い理解度を得た。 ・ナメコ栽培と収穫体験を行うことで、放射性物質に関する情報提供だけでなく、地域産業（林業・特用林産物生産）への関心が深まり、放射性物質に関する内容についても、より自分事として捉えることができたと考えられる。 ・副次的ではあるが、森林内の放射性物質動態の授業をシンポジウムのライブ配信本番と同じ内容、同じ時間配分で行ったことで、シンポジウムで実施した場合の改善点を明らかにすることができた。 	
問題点	改善方法案
<p>森林内の放射性物質動態の授業で、質問が出なかった。</p>	<p>講師が受講生に逆に質問をする等工夫をしたが、出前講座だと質問がしづらい雰囲気があると見受けられた。素朴な疑問を質問して良いということを強調したり、教職員からの質問も促す等検討する。</p>

6)小括

①プログラムの企画内容・時間設定の成果、問題点等

- ・出前講座では、対象者のニーズを細かく聞き取り、興味・関心の高い内容を絞り込み、どのようにすればそれが対象者に伝わるのかを追求し、カリキュラム、説明資料・説明方法を工夫している。

- ・教育機関での出前講座は、平成30年度に高校、令和2年度に小学校で実施しているが、今年度初めて中学校を対象に実施した（小学校と合同授業）。小学校での実施同様、対象者が最後まで飽きずに講義内容を聞けるように、興味を持ったり楽しめる内容を盛り込むこととし、サーベイメーターによる木材・葉・土壌表層の線量測定を子どもたちに実施させることを試みた。
- ・これらの結果、アンケートからも分かるように、理解度1（とてもよく分かった）と2（どちらかというと分かった）の割合が、「なめこ収穫体験」100%、「福島の森、今どうなってるの？」95%と非常に高く、1の割合もそれぞれ90%、75%という高い結果となり、情報提供の内容・レベル・説明方法は適切だったと言える。
- ・新型コロナウイルス感染症の影響により、出前講座の実施回数の縮減等、コロナ禍特有の問題が発生した。感染拡大防止はもちろんのこと、受講生・講師陣が安心して参加できるよう、今年度、オンラインでの出前講座も検討したが、出前講座は受講生と講師陣、受講生間での活発な対話を重視していることから、オンラインでの実施が難しい面があった。今後も、幅広い普及手法を検討していきたい。

②当日の対応、実施結果等の成果、問題点等

- ・新型コロナウイルス感染症対策について十分に検討・準備を重ね、当日は対策を徹底することで、混乱なく実施することができた。
- ・森林内の放射性物質動態の授業でも、サーベイメーターによる木材・葉・土壌表層の線量測定実験を行い、子どもたちが興味・関心を持って講義を聞いたことから、高い理解度を得た。
- ・ナメコ栽培と収穫体験を行うことで、放射性物質に関する情報提供だけでなく、地域産業（林業・特用林産物生産）への関心が深まり、放射性物質に関する内容についても、より自分事として捉えることができたと考えられる。

③その他

- ・本年度のアンケートでは満足度の項目を取らなかったが、昨年度までの本事業の7年間で実施してきたシンポジウム、講習会等様々な普及啓発手法のうち、出前講座が最も対象者の満足度が高いものとなっている。それは、各講座の対象者ごとに地域・現場の状況や課題を正確に捉え、ニーズに合わせた内容を直接的に提供し得ること、受講生と講師陣、あるいは受講生間での活発な対話を重視することで、高い学びと新たなネットワークづくりのきっかけとなり得るためである。
- ・新型コロナウイルス感染症の感染拡大防止対策も十分に留意しながら、出前講座による「より密度の濃い対話」による普及と、シンポジウム等によるオンラインでの幅広い普及とを両輪にしながら、効果的な普及啓発を検討することが重要と考える。

5. 総括

東京電力福島第一原子力発電所事故により放出された放射性物質の影響を受けた地域では、平成31年4月までに、帰還困難区域と一部の地域を除き、避難指示が解除されたところである。これらの地域は、森林が大半を占めており、地域の基幹産業の一つとして林業が営まれてきたが、事故後、森林の整備や林業生産活動が停滞していることから、地域の復興を進める上で、林業の再生を図る必要がある。

また、平成29年12月に復興庁が策定した「風評払拭・リスクコミュニケーション強化戦略」では、政府一体となって風評払拭に取り組むとともに、放射線に関する正しい知識の理解と誤解の払拭を図るための工夫を凝らした情報発信を行うこととされており、本事業もこの戦略に位置づけされている。

本事業は、こうした情勢を踏まえ、福島における森林の現状に対する理解の深まりや、幅広い関係者の参画・連携の下で行われている福島の森林・林業の再生に向けた取組等の普及啓発を行うため、森林における放射性物質の調査・研究や林業再生に向けた取組等に関する最新の知見、成果を整理し、それらを分かりやすくかつ正確に地域住民や森林所有者、行政関係者及びマスコミ等に幅広く伝えるとともに、地域の復興加速化、風評の払拭等を図るための普及啓発を行った。

具体的な取組としてのパンフレット、シンポジウム、出前講座の成果等については、各実施状況、実施後のミーティング、アンケートの集計結果・考察、企画・運営改善等から評価した。シンポジウム及び出前講座のアンケートは、各コマ（発表や講義の単位として使用）の内容や進行等に関する満足度を1（高）から5（低）までの5段階で集計し、満足度1と2の回答割合を主軸に評価した。

(1)パンフレットの成果等

- ・これまでの調査・研究等で明らかになった森林の放射性物質対策等の情報を、分かりやすく再構成・表現したパンフレットについて、過年度事業における疑問や要望を元に内容を再整理して制作を行った。7,000部作成し、福島県、福島県出先事務所、福島県内の全市町村、森林組合、森林管理局・署のほか、林業関係団体など約120の機関・団体へ配布した。また、林野庁及び福島県のウェブサイトにおいて掲載した。

(2)シンポジウムの成果等

- ・新型コロナウイルス感染症感染拡大防止のため、昨年度に引き続きオンライン・ライブ配信及び事前・事後の動画コンテンツ配信にてシンポジウムを実施した。このことにより、開催場所によらない、全国からの参加が得られた。
- ・ライブ配信のプログラムは、「放射線ってどんなもの？」と「福島の森、今どうなってるの？」で放射線の基礎知識や森林内の放射性物質の動態の知識を習得したのち、「森と木に親しもう」「森のめぐみ なめこ収穫」の2体験を通して福島の森林・木材・森の恵みの魅力を体感する構成とした。
- ・本年度も昨年度に引き続き、次世代を担う若年層（子ども及びその保護者）が、福島の森・木・林産物の魅力や現状を知ること、さらに、福島県の森林・林業再生に貢献する何らか

の行動に繋がることを目指した。一昨年度の会場での親子向けシンポジウム及び昨年度の親子向けオンラインシンポジウムの実施成果から、全体を通して楽しめる要素があり、体験を伴う「学び」が、子どもだけではなく保護者にも有効であることの実証を参考に、よりよいシンポジウムの開催を目指した。

- ・参加者の様子、アンケートの結果から、「福島の森林等の現状の理解促進」については、子ども・保護者共に理解度も高く、またプログラム全体を通して満足度も非常に高かった。体験（木工、キノコ栽培・収穫）と学びを通して、森の恵みを楽しみながら現状を理解するという、狙い通りの成果を得た。これは、昨年度から始めたオンラインによる普及の中で、子どもに理解ができるような配布・投影資料の作成、飽きさせないプログラムを作成したことが大きい。結果、「福島のキノコを食べたり、森を大事にしたいと思った。いっぱい森で遊びたい」「買い物に行ったら福島のものを見つけるのが楽しみになった」「絶対福島へ行ってみたいね、スーパーで福島の食べ物を探したいねと子どもと話した」等、行動に繋がるコメントが子どもと保護者共に多くみられたことから、シンポジウムの開催が、「森林・林業の再生に貢献する行動」に繋がるきっかけになったと考えられる。
- ・アンケートは満足度等を1（満足）～5（不満）の5段階評価に6（未視聴）を加えて実施し、保護者と、子どもは小学校中学年以下と小学校高学年以上に分けて分析を行った。参加者全体としては、1と2の割合をみると、「放射線ってどんなもの？」77%、「福島の森、今どうなってるの？」73%、「森と木に親しもう」79%、「森のめぐみ なめこ収穫」80%、「【動画】端材であそぼう！—端材デザイナー編—」59%（未視聴を除くと76%）で、シンポジウムに対する満足度は全体的に高かった。
- ・年代別に1と2の回答をみると、子どもは「放射線ってどんなもの？」と「福島の森、今どうなってるの？」の座学2コマについて、小学校高学年以上89%・85%、小学校中学年以下66%・66%に代表されるように、全てのコマで小学校高学年以上8割以上、小学校中学年以下6～7割が満足と回答した。森林中の放射線量やキノコ出荷制限についての理解度も同様に小学校高学年以上84%、小学校中学年以下67%で、想定した対象年齢層には理解が促されたといえる結果となった。また、「【動画】端材であそぼう！—端材デザイナー編—」は、いずれの年齢層も1と2の回答が約6割と大きな差は見られず、昨年度の課題であった対象年齢と制作物のミスマッチは改善されたと言える。
- ・保護者は、1と2の回答が「放射線ってどんなもの？」84%、「福島の森、今どうなってるの？」79%で、その他全てのコマ及び森林中の放射線量やキノコ出荷制限についての理解度で、約8割以上が高い評価をつけ、いずれも満足度・理解度は高かった（「【動画】端材であそぼう！—端材デザイナー編—」のみ59%）。
- ・「福島を応援したい気持ちになったか」は、1（思う）と2（どちらかというと思う）の回答で小学校高学年以上91%、小学校中学年以下87%と非常に高く、保護者は96%とほぼ全員が応援したいと回答した。一方「キノコが苦手なので食べて応援することができない(子)」というコメントがあり、本シンポジウムでは木を使ったりキノコを食べることで応援しようとしているため、応援に消極的な理由となったと考えられる。
- ・広報手法のうち参加者増に繋がったと考えられる方法としては以下が挙げられる。
*開催市区内の全小学校の3～6年生へのチラシ配布：参加者数が最も多い広報手法だった（全体の72%）。

市区に林業や環境等の専任の課があり、日頃からイベントや学校教育の中で普及啓発を行っていることで市区民の環境等への意識が高い。また、市区への協力依頼の際に丁寧に働きかけたことで、市区担当者等に熱心に対応していただいた。その結果、参加者数が非常に多く、定員も例年よりも早く満員となったと考えられる。

* 知人等への直接の広報（口コミ）：次点で参加者数が多い広報手法だった（全体の11%）。

参加者が信頼関係のある知人からの情報によって安心感を持つことで、不特定多数に向けた広報よりも参加率が上がると考えられる。

- ・今年度は動画コンテンツのデザイン性と企画内容・構成の改善に力を入れ、2022年2月時点で昨年度公開の動画よりも今年度更新した動画の再生数が増えている。引き続きコンテンツの充実を図っていきたい。

(3) 出前講座の成果等

- ・出前講座では、対象者のニーズを細かく聞き取り、興味・関心の高い内容を絞り込み、どのようにすればそれが対象者に伝わるのかを追求し、カリキュラム、説明資料・説明方法を工夫している。
- ・教育機関での出前講座は、平成30年度に高校、令和2年度に小学校で実施しているが、今年度初めて中学校を対象に実施した（小学校と合同授業）。小学校での実施同様、対象者が最後まで飽きずに講義内容を聞けるように、興味を持ったり楽しめる内容を盛り込むこととし、サーベイメーターによる木材・葉・土壌表層の線量測定を子どもたちに実施させることを試みた。
- ・アンケート結果から、理解度1（とてもよく分かった）と2（どちらかというと分かった）の割合が、「なめこ収穫体験」100%、「福島の子、今どうなってるの？」95%と非常に高く、1の割合もそれぞれ90%、75%という高い結果となり、情報提供の内容・レベル・説明方法は適切だったと言える。

(4) 主要な課題と改善案

1) パンフレット

- ・一部校正の修正漏れのため手戻りが生じた。パンフレット編集の各工程で複数の職員で確認作業を行ったが、今後は校正の専門家にも確認作業を依頼する等のチェック体制を整える。なお、やりとりの効率化のため、原稿を電子媒体（ワード形式）により電子データ化して編集作業を実施することを検討する。

2) シンポジウム

- ・オンライン開催は会場開催と異なり、参加者の参加状況の実績が把握しづらい面は残る。ライブ配信当日の参加者数が469家庭、配信翌日の参加者数が82家庭（469家庭とは重複しない者）、実施後一か月間の合計は597家庭と、聴講や関係者の視聴を加味しても、500家庭中相応の参加があったと推察される。参加者とその他を分けられないので正確な数字が出せないこと、どの程度の視聴時間なのかが把握できない（参加者数は、アクセス解析の、重複のない視聴者数である『ユニーク視聴者数』という数字を参照した）。また、昨年度からの課題としてアンケートの回収率が低く、今年度は回答者へのプレゼント品を木製

品から食品に替えたが、効果が低かった（回収率 R2：23%、R3：33%）。より効果的な回収手法の仕方を検討する必要がある。

- ・ライブ配信の課題として、チャットによる質問時間を設けたが、出演者と参加者との間に配信のタイムラグが20～30秒生じ、質問を待つ間、進行が途切れる場面があった。先立って質問を書き込むよう事務局がチャットで促したが、参加者は配信画面上が質問コーナーに入ってから質問を書き込み始めたため、出演者が先に「今から質問を受け付ける」と誘導し、質問が入ってくるまで別の話題で繋ぐ等、時差を埋める対応を検討する。
- ・また、チャット確認用のタブレットがネットワークの不調により、配信中に一度通信が途切れるトラブルがあり、今後の課題として、配信会場は有線LANで接続できる会場が望ましいため選定時に留意する必要がある。
- ・平成26年度から30年度に行ったシンポジウムでは、今回と同じく関係者だけでなく一般市民も含めた参加を想定して企画していたが、参加者の大半は林業関係者であり、一般市民への普及啓発が課題であった。あわせて、「風評払拭・リスクコミュニケーション強化戦略（復興庁）」の中で、伝えるべき対象として「児童生徒及び教師等教育関係者」が一番上位に挙げられているように、次世代を担う子どもたちとその保護者に、福島の実情を伝え、理解を促進し、さらに一歩進み、福島県の森林・林業再生に貢献する何らかの行動を起こす応援団を増やしていくことは、引き続き重要な課題になる。
- ・広報手法については、広く一般のメディアに取り上げてもらえるよう、魅力的なプログラムを企画することはもちろんのこと、今年度の成果を分かりやすくPRしながら取材を依頼していくことが必要となる。

3) 出前講座

- ・新型コロナウイルス感染症の影響により、出前講座の実施回数の縮減等、コロナ禍特有の問題が発生した。感染拡大防止はもちろんのこと、受講生・講師陣が安心して参加できるよう、今年度、オンラインでの出前講座も検討したが、出前講座は受講生と講師陣、受講生間での活発な対話を重視していることから、オンラインでの実施が難しい面があった。
- ・新型コロナウイルス感染症の感染拡大防止対策も十分に留意しながら、出前講座による「より密度の濃い対話」による普及と、シンポジウム等によるオンラインでの幅広い普及とを両輪にしながら、効果的な普及啓発を検討することが重要と考える。

4) 事業全体を通しての課題

- ・本事業は平成26年度から開始され、復興状況や現場の実情・ニーズに対応しながら、対象と目的ごとにプログラムを変えて実施してきた。現在、東日本大震災から11年が経過し、首都圏だけでなく福島県内でも関心の風化が問題となっている一方、放射性物質について不安が払拭しきれていない実情があることが一昨年度までの事業で明らかになった。この点は、情報にアクセスしやすい手法として、オンライン講座や動画コンテンツ、または立ち寄りやすい場所での展示等が効果的と考えられる。
- ・本普及啓発事業では、福島県の森林・林業の再生をより力強く後押しするために、前述の林業・林産業等に従事する者の不安払拭と共に、森林・林業の理解者・応援者としての福島

県内及び福島県外の一般市民への理解促進の両軸が求められている。後者の対応としては、正確な情報の伝達はもちろんのこと、対象者の興味関心を喚起し共感を得られる要素を盛り込むことが重要となる。

- 本年度事業は年度当初の計画とは変更し、新型コロナウイルス感染症感染拡大防止対策を徹底し、オンラインでの効果的な普及手法を実践した。コロナ禍でオンラインでの学習・普及の手法が飛躍的に開発されるとともに、その体験者も増え、コミュニケーションやネットワーキングの新時代が始まっている。次年度以降も引き続き新型コロナウイルスの影響が想定される中、事業目的に沿い、対象者の理解と共感の深度を高く保ちながら、オンラインプログラムの内容や情報提供の方法等、新しい切り口で柔軟に普及手法を検討していく必要がある。